

時代を読み解く

シリーズ 56

日本を仮想敵国に
情報将校55人養成

チェスター・ニミッツ提督は、第二次世界大戦時、

米国に勝利をもたらした太平洋艦隊司令官として知られているが、同提督がいかに、ミッドウェー海戦等の敗因として、日本海軍暗号が解読されたためとされて

たかについては我が国ではあまり知られていない。また、ミッドウェー海戦等の敗因として、日本海軍暗号が解読されたためとされて

「ハイポ」ではなく「ネガト」に指示したため、解読できなかった。首都情報組織における機能不全が、ハワイに奇襲をもたらした。太平洋艦隊司令官キンメルが更迭され、ニミッツ司令官が誕生した。前職が海軍省人事部長であったニミッツは、「諸君の高い能力は承知している。同作戦部による任務付与

イポ」が動態情報に専念できるよう、作為したのである。

ニミッツ提督と情報

解読成果共有せず
開戦を察知できず

開戦を察知できず

開戦を察知できず

開戦を察知できず

開戦を察知できず

開戦を察知できず

開戦を察知できず



今月の講師

なかにし 中西 氏 啓種

防衛研究所 戦史研究センター
国際紛争史研究室 主任研究官

1973（昭和48）年生まれ。埼玉県出身。防衛大学校航空宇宙工学科卒業、同安全保障研究科（国際安全保障）前期課程修了。航空自衛隊の部隊、航空幕僚監部を中心に、防衛力整備などに従事し、2025年3月より現職。専門はロシア安全保障、情報。修士論文「プーチン政権の兵器輸出戦略 一対中戦闘機輸出を事例として」にて安全保障学修士。

きたが、日米開戦時、同暗号はほぼ解読されてはいない。わずか半年後、米海軍はミッドウェー海戦に勝利した。何が変わったのか？

日米開戦時、優秀な対日情報将校らは多数存在した。日露戦争後、米国は日本を仮想敵国として、戦争計画を策定するとともに専

門家らの養成を開始した。米海軍は「日本語研修生」制度により、55人の対日情報将校らを養成しており、特に優秀な2人（在ハワイ情報部隊「ハイポ」長・ロシユフォート中佐と、太平洋艦隊司令部情報参謀・レイトン少佐）が開戦時のハ

にも問題があった。開戦時、米海軍は対日通信情報部隊として3個部隊（首都ワシントン「ネガト」、在ハワイ「ハイポ」と在比「ギャスト」）を有し、日本の各種通信を傍受、暗号解読等を実施していた。同作戦部

幕僚らを誰一人、更迭しなかった。前述の情報将校レイトンとロシユフォートは、報告ごとに信頼を重ね、重用された。そしてニミツは対日情報将校らを空母に乗り組ませ、空母と通信

情報に基づく空母の一撃離脱作戦は成果を挙げたが、「ネガト」との間で分析結果をめぐる対立が大きくなり、太平洋艦隊の作戦立案にも支障が出た。

事態を憂慮したニミツは、上司である合衆国艦隊司令官キング大將に「今日の傍受結果を『ハイポ』が担当し、それ以外を『ネガト』が担当する」ように、幕僚らを通さずに直訴し、承認を得た。つまり「ネガト」の妨害を取り除き「ハ